

# 述語型直喩の類型\*1

菊 地 礼

## Categories of Similes Used as Predicates

KIKUCHI Rei\*2

This paper categorizes predicative similes (predicate-type similes) based on actual examples. Previous research often assumes that the typical form of a simile is "A ha B no yōda," which uses the terminal form of the auxiliary verb "yōda." However, in practice, complex predicate forms such as "yō ni mieru" (appears like) connecting to formal verbs, or "yō na mono da" (is like something) connecting to formal nouns, are also used. In actual usage, adverbial modifying similes (e.g., "A ha B no yō ni C") are more common, and predicative similes are relatively rare. Nevertheless, predicative similes are easier to consider as model cases. Therefore, defining the range of forms that predicative similes can take is valuable as preliminary preparation for theoretical considerations of how similes are formed and what expressive value they hold.

キーワード：比喩 直喩 述語 構文

### 1. はじめに

本稿は述語として用いた直喩の構文的な類型を示し、それぞれの性質・特徴を記述する。

直喩とは「或るものや状態、動作などを、明示的に別のもの、別の状態、動作などになぞらえる表現」(佐藤ほか 2006:190)とされる。従来の比喩研究では「AはBのようだ」を直喩のモデルケースとし、隠喩「AはBだ」と比較し、違いを考察するアプローチが多い。しかし、直喩は多様な形式を取ることは知られている(国立国語研究所 1977, 山梨 1988, 鍋島 2016, 小松原 2023)。述語として用いた直喩も「AはBのようだ」だけでなく、多様な類型を持つ。だが、実際の構文の類型やそれらの持つ性質・特徴は明らかでない。考察の蓄積とは対照的に基礎的な記述が進んでいないのである。そこで本稿では、述語として用いた直喩の構文を整理する。ここでは調査対象を助動詞「ようだ」を用いた直喩に限定する。「ようだ」を用いた直喩が数量的に最も多く、直喩の典型と言えるからである。

### 2. 調査対象の収集

調査対象の収集には「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を用いた。複数のジャンル・資料にまたがって構築され、現状利用できる言語資源として最も大規模であるため、直喩の実態を把握する上で最適だと判断したためである。

検索アプリケーション「中納言」にて語彙素「様」で検索して得た助動詞「ようだ」の全 362,563 例から比喩用法の例を選別した。その結果として、23,262 例を得た。それらの直喩例に対して「ようだ」の活用形や「修飾／述語」といった構文タイプをタグ付けした。それにより、述語として用いた直喩を選別した結果、3,028 例(直喩全体の 13%)を得た。また、「ようで」のような中止節(204 例)も従属節の述語と見て加えた。合計で 3,232 例を対象の表現として得た。

### 3. 述語型直喩の類型

本節では上記により得た述語型直喩を類型化する。そして、それらの性質・特徴を概説する。類型化するにあたり、次のような基準を設けた。

- ①：「ようだ」が主節にあるか従属節にあるか
- ②：文末に否定形式が含まれているか

\*1 本稿は JSPS23K12198 による研究成果の一部である。

\*2 工学科リベラルアーツ教育院助教  
原稿受付 2024 年 7 月 19 日

## ③：「AはBのよう」以下に接続する文法形式

主節述語と従属節述語では述語文末に出現し得る文法形式が異なるため、分けた。また、肯定／否定は文の極性を反転させるものであり、文の内容に強く影響する。そこで、否定形式「ない」「ず」等が含まれるパターンを分けた。なお、「ない」「ず」等が含まれるという形式的な認定のため、実質的には肯定文と同様の「違いない」等も含まれる。そして、助動詞「ようだ」の語幹「よう」以下は活用形により、「に」「で」「だ」「な」といった形態を取る。これらに種々の文法形式が接続する（またはしない）ことにより、述語を形成する。それらの活用形と文法形式を整理した。なお、「ではない」「じゃない」のように異形態を取っていても同一の語彙素と認定できるものは同じ類型とした。また、「ではないか」のように副助詞や終助詞を付加した形式は、個別の類型を用意しない。たとえば、「ではないか」は「ではない」として認定する。

## 3-1 主節述語でかつ肯定形式

本項では主節述語<sup>\*3</sup>として直喩を用い、かつ肯定形式によって表出される直喩の類型を示す（表1）。

(1) ヴィルニクスから杯を返されたヴェルジニクスは、一口すすってみた。「うまい。まじりけなく澄みきっている。深森の泉からくんだ水のようにだ<sup>\*4</sup>」

(PB1n\_00019-88690 ポール・スチュワート、唐沢則幸『嵐を追う者たち』<sup>\*5</sup>)

(2) 夜ここで寝たら、まるで星の海に浮かんでいるようだろう。(PB59\_00509-64300 ヴァレリー・パーヴ、長田乃莉子『まぼろしのプリンス』)

(1) (2) は終止形「ようだ」を用いている。(2) はモダリティ形式「(だ) ろう」が接続する。

(1) は口にした液体を喩えの対象として、「深森の泉からくんだ水」を喩辞<sup>\*6</sup>とする。一般に直喩は「類似性を示す」「類似性を設定する」(佐藤 1978)とされるが、この喩辞は仮想的な事柄を提示<sup>\*7</sup>しており、当該の液体と喩辞の事物に類似性を見て取ることはできない。ここでは当該の液体の美味しさについての評価として喩辞は機能する。(2) はこの場所で寝ことで見られる情景を「星の海に浮かんでいる」と仮想的な様子で表す。しかし、未来の情景であるため、「(だ)

ろう」の付加により推量判断の文としている。

表1 主節述語でかつ肯定形式の直喩

AはBのようだ	φ
	+モダリティ形式
AはBのよう	φ
AはBのような	φ
	+のだ
AはBのような+形式名詞	φ
	+判断辞
	+だろう
	+する
AはBのように	φ
	+判断辞
AはBのようで	φ

(3) 熱い御飯に唐辛子の佃煮で、口の中は火事のよう。(PB51\_00043-86220 青山俊董『道元禅師に学ぶ人生』)

(3) は語幹「よう」によって文を終止する。唐辛子の佃煮を熱いご飯にかけて食べたことで、口の中が強く刺激される状態を「火事」と喩える。「だ」が脱落することで、話者の判断を明示しないことになる。ここでは「よう」が持つ証拠性 (Evidentiality) により、「火事」というイメージが出来るだけの根拠がある(→ご飯と唐辛子で口のなかが強く刺激されるという体験) ことを示して、話者の判断を介さずに感覚を直接的に提示する。

(4) 良く見ると、裂け目の周囲には鋭いトゲがビッシリと生えている。それは、歯というよりも、むしろ牙のような。(PB39\_00364-27160 栗府二郎『クッキング・オン!』)

(5) リーディングエッジはまるで何かで研いだ刃のようなのです。(LBj7\_00004 - 12170 高橋治『シングルをめざす人のゴルフクラブの選び方』)

(4) は連体形「ような」で文が終止している。(5) は「ような」に「のです」が接続する。

<sup>\*3</sup> 単文の場合も含む。

<sup>\*4</sup> 分析の対象となる表現には下線を引く。

<sup>\*5</sup> 用例の出典は(BCCWJ)のサンプルID - 開始位置 著者名『書籍名』で示す。

<sup>\*6</sup> 喩えの媒体になる事物・事柄を表す語句を「喩辞」と呼

称する。

<sup>\*7</sup> フィクション作品内の記述であり、実際に「ヴェルジニクス」が「深森の泉からくんだ水」を飲んだ経験があるかもしれないが、ここではそのような経験がないと仮定する。

(4) は「ような」以後の要素が明示されず、省略法 (ellipsis) となる。直喩によるイメージを提供しつつ、後続要素の非明示によって文を簡潔にし、また読み手の想像の余地を残す。(5) は「のだ」文を形成している。「のだ」文は説明の文を形成する形式であり、ここでも「リーディングエッジ」の見た目を喩辞「何かで研いだ刃」で説明する文となる。

(6) 肌は内臓の状態を現わす鏡のようなもの。  
(PB3n\_00099-10990 『キレイにやせる！レシピ&マニュアル』)

(7) 最初の高い血圧のデータが明らかに間違いならわかりますが、低くなるまで測るのはおかしいと思います。まるで、神社のおみくじで大吉が出るまで引き続けるようなものです。(Yahoo! 知恵袋)

(8) 「天朝様だか禁裡様だか知らないが、江戸に担いでくるとさ。どんなお方だか、一向わからないね。お雛様の人形なら、なじみだけれど。ははは、どうせお人形のようなもんだらうよ。〔後略〕」(PB49\_00526-73160 多岐川恭『江戸の敵』)

(9) 「ジョージ・ルイス」を買った時には、夢のような気がした (PB30\_00005-15230 辺里喬『ノスタルジアへの誘い』)

(6) ～ (9) は連体形「ような」に「もの」や「気」等の形式名詞が接続した形式である。(6) は「ようなもの」で終止し、(7) はそれに判断辞「です」が接続している。(8) は (6) のようなタイプに対し、文末モダリティ形式「だろう」が接続する。(9) は「気」「気分」等の気分に関する形式名詞に「する」が接続した「気がする」が「ような」に接続する。

(6) は喩辞「鏡」を用いて、肌の働きを説明する。「鏡のよう」ではなく「鏡のようなもの」とすることで、一人一人の内臓の問題ではなく、内臓一般の話とする。つまり、一般化した説明と解釈できる\*8。(7) は都合のいい数値が出るまで血圧を測ることを「神社のおみくじで大吉が出るまで引き続ける」と喩え、どのような行為かを説明する。(8) は江戸に来る天子を「人形」とする。会話の中で「ようなものだ」と直言することを避けるため、間接的な物言いになるようにモダリティ形式を付加していると思われる。(9) は普段とは異なる非日常的な事態を喩辞「夢」で喩える。そのような非日常性が実際に話者の実感内のものであることを「気がする」により明示する。(8) (9) は

断定を回避するという点でいわゆる「婉曲」的な表現となる。

(10) 昼間なのに星空を見るかと誘うクラヴィス。彼の力によってそこは星いっぱいのプラネタリウムのように！ (PB2n\_00096-10070 『アンジェリークアドバンスガイド』)

(11) こういうふうにしてしか人は人生をとらえることができないと思います。つまり、すでに上演されて、結末を知っているオペラ・コミックのようです。

(OB1X\_00055-37350 フランソワーズ・サガン、朝吹由紀子『愛と同じくらい孤独』)

(10) は連用形「ように」で文が終止している。(11) は「ように」に判断辞「です」が接続する。

(10) は「ように」以後の本来係り先として明示される要素が無い。(4) と同じく省略法となる。(11) は人生の捉え方を喩辞「すでに上演されて、結末を知っているオペラ・コミック」と表現する。この表現で喩えられているのは前文の「こういうふうにしてしか人は人生をとらえることができない」ことである。喩辞はその後文で「つまり」によって導入され、前文の要約として提示されている。「ように」とすることで喩辞が前文に係るものであることを表示し、倒置法によって表現する。

(12) その雨滴が夏への準備とわかっていても、いつしか心まで雨に降りこめられていくように。

(PM41\_00434-1130 渡辺尚子『花時間』)

(12) は連用形「ように」で文が終止している。「ように」以後の本来主節として明示される要素が無い。(4) のように省略法となる。

### 3-2 従属節述語でかつ肯定形式

本項では従属節\*9の述語として用い、かつ肯定形式である直喩の類型を示す (表2)。

(13) 老婆は風のように、すばやく病室から出たかと思うと、何かをひっさげてまたあらわれ〔後略〕

(PB2n\_00006-59310 太宰治『走れメロス』)

(14) あたかも高僧と接しているかのよう、と形容される人となりはこれまでに述べてきた通りである。

(PB53\_00032-11420 吉野泰貴『流星戦記』)

\*8 「学生は勉強するものだ」のような非比喩的な表現に出現する「もの」も参照。

\*9 複文中の主節外に出現した直喩を広く認定した。また、補文内に出現した例も含む。

表2 従属節述語でかつ肯定形式の直喩

AはBのよう	φ
	+と用言
	+接続助詞
AはBのようだ	+と形式用言
	+接続助詞
	+(だ)ろう+接続助詞
AはBのような+形式名詞	+接続助詞
	+と形式用言
	+と用言
	+判断辞連用形
AはBのように+形式用言	φ
	形式用言=知覚・思考動詞
	形式用言=変化・存在動詞
	+接続助詞
AはBのようで	φ
	+あり
	+いる

(15) また、家の中と違い、室内が広く公園のようなので、ホッと安心できる温かい場所でした。  
(OP14\_00001-65610『広報とりで』)

(13) は語幹「よう」で文が中止し、その後また老婆の動作の描写が続く。(14) は補文マーカー「と」を伴い、「形容する」に接続し、その内容を直喩によって補充する。(15) は「よう」に接続助詞「なので」が接続する。前件「室内が広く公園のよう」を理由とし、後件「ホッと安心できる温かい場所でした」という帰結を導く。

(16) 三人は笑い声をあげた。互いに抱きついたり、突っついたりしている様子は、まるで幼なじみのようだとケヴィンは思った。(LBm9\_00106-67370 アンドリュー・ニーダーマン、庭植奈穂子『悪魔の弁護人』)

(17) 会見の席で、セネガルの監督は言った。「夢のようだが、奇跡ではない。〔後略〕」(PB47\_00264-68000 沢木耕太郎『杯』)

(18) 今のところそこまで患者さんに気に入られているふしはないが、あなたは向日葵のようだから向日葵柄の浴衣を仕立てよう！(LBm9\_00027-31560 小林光恵『ぼけナース』)

(19) 「峨々たる大岩石のようだったり、重厚な扉のようだったり〔中略〕重なり合い犇き合い、流水は沿岸している。〔後略〕」(PB44\_00288 - 29410 菊地慶一『流水』)

(20) 例え夫の心が鉄のようであろうとも、とかすことだろう。(LBI1\_00031 - 93440 下重暁子『女が 30 代にやっておきたいこと』)

(16) は終止形「ようだ」に文末でモダリティとなる形式的な用言「と～思う」が接続する。(17)～(19) は「が」「から」「たり」といった接続助詞が接続し、従属節を形成する。(20) は「(だ) ろう」に接続助詞「とも」が接続する。

(16) は三人の関係性について、喩辞「幼なじみ」と規定する。「と～思った」により、それが話者の心内に生起した思考であることを明示する。(17) は「夢のようだ」を前件とし、「奇跡ではない」を後件とする。夢という前件から想定される「偶然に起きた」のような想定を否定し、実力で勝ち取ったことを伝えるために「奇跡ではない」とする。(18) は「あなたは向日葵のようだ」を前件とし、「向日葵柄の浴衣を仕立てよう」を後件とする。比喩的に人物を評価し、それを理由として浴衣の仕立て方を提案する。(19) は「ようだ」に接続助詞「たり」が付属し、「峨々たる大岩石のようだったり、重厚な扉のようだったり」と並列的に直喩を使用する。(20) は「ようだ」に「(だ) ろう」が接続し、さらに接続助詞「とも」が接続する。これにより、「鉄のようであろうとも」という前件を提示し、困難のように見えてもやり遂げてみせるという後件を導く。

(21) ヨーロッパでは、八百二十五年に行われたパリの宗教会議で、浮き彫りは絵画と同等の画像として認められたからである。彫刻も浮き彫りなら絵のようなものだから、絵とみなして許すことにしよう、ということになったのだ。(PB57\_00088-3080『NHK 世界美術館紀行』)

(22) 〔前略〕銃器は、日本人から見れば、目を剥くようなもののだけれど、サヴァイヴァリスト自身のものには及びもつかない。(LBh3\_00116 - 14440 枝川公一『現代アメリカ犯罪全書』)

(23) 〔前略〕外国のことを描いた「諸蕃図」があったのだという、これは現存しないが、地図のようなものであったとも考えられる。(PB53\_00337-71340 武田雅哉『<鬼子>たちの肖像』)

(24) 肉体と魂のパラパラの定着は、このような「拒絶反応」を引き起こす可能性があり、それは時間の間

題かもしれぬ、つまり「不老不死」どころか「時限爆弾」付きのようなものと自分の身体に対して新しい認識に至るのである。(PB57\_00050-58570 北迷眞、比賀始『「鋼の錬金術師」解説』)

(25) 魂は馬のようなものであり、神が乗ると、神の選ぶところに進み、悪魔が乗ると、悪魔の選ぶところに行く。(PB21\_00128 - 45440 ジェフリー・B・ラッセル、大瀧啓裕『悪魔の系譜』)

(21)～(25)は連体形「ような」に形式名詞「もの」が接続した「ようなもの」形式を用いる。(21)は「だから」、(22)は「だけれど」といった接続助詞が接続する。(23)(24)は補文マーカー「と」が接続し、「考えられる」「認識に至る」の内容を補充する。(25)は「であり」を用い、従属節を形成する。

(21)は浮き彫りの彫刻を「絵のようなもの」と表す。浮き彫り一般を「絵」のようだと評価し、その帰結として宗教的な画像と「みなして許す」ことを提示する。(22)は接続助詞「(だ)けれど」が接続し、前件の想定から外れるものとして後件を示す。(23)は、「諸蕃図」について「地図のようなもの」と評価する。「とも考えられる」の接続により、その評価が話者の心内のものであることを明示する。(24)は補文マーカー「と」があり、「認識に至る」に係る。その認識の内容を「「時限爆弾」付きのようなもの」と補充し、自身の体の状態を説明する。(25)は「魂は馬のようなもの」を前件とし、魂を乗り物に見立てることで、後件にそれに乗る神・悪魔について述べる。

(26) 小さな白い雲が〔中略〕ときには雪の山のように見え、また、あるときには白いくじらのように見えたりしました。(PB1n\_00047 - 47080 バラージュ・ベー、徳永康元『ほんとうの空色』)

(27)〔前略〕丘の斜面の緑のなかに、キラッと白く光るものが見えたのだ。だえん形をしていた。大きな鏡が太陽の光に反射したように見えた。(LBen\_00021-8520 三田村信行『おそろしい手紙』)

(28) ウォーカーは行く手に何があるのか、まったく見えなかった。時間が止まったように感じる。

(LB19\_00076-58110 キャロリン・ホーガン、赤尾秀子『封印』)

(29) 体重はついに三十三キロとなり、手足は骨と皮のようにみえるが、「自分はやせているとは思わない」と治療を拒否する。(LBf4\_00014 - 68380 小林清史、

森本清『脳100の新知識』)

(30)『積塵成山』は〔中略〕どう見ても鍋敷きのように見えるので、私は、磐溪が珍しい外国の鍋敷きを手に入れたとき、墨を塗って文様の記録を取ったのだと思っていたが、そうではなかった。(LBd1\_00001 - 16750 藤宜『江戸文人のスクラップブック』)

(31)〔前略〕宮本武蔵の記した『五輪書』が隠れた大ベストセラーとなっている。その中で彼はこう記している。「水を手本とし、心を水のようにするのである。(LBs1\_00026-1240 児玉光雄『松井秀喜・イチローに学ぶプロフェッショナル・シンキング』)

(32)〔前略〕Dさんは親しい植木屋さんに頼んで、家の前に白樺と、うばめ榎などの成木や苗木を植えました。これが十数年へた今日では建物をしのぐ程の高さになり、鬱蒼とした森のようになりました。

(PB55\_00075-36670 笠原顯司『「住みか」のヒント』)

(33)いろいろな分野に挑戦している岡本夏生さんは、芸能界の先輩たちから吸収したいことが山のようにあるのでしょね。(OB4X\_00282-64920 『それいけ！！コロロジ』)

(34) そんな日の朝は、カタツムリの歩いた跡が銀色の道のようになって、なん本も畑のなかを走っていました。(PB2n\_00136 - 38470 竹田弘『星をまく人』)

(26) から (34) は連用形「ように」に形式的な用言が接続した構文である。(26)～(30)は知覚動詞「見える」や思考・感覚動詞「感じる」が接続する。(26)は連用形「見え」で中止する。(27)(28)は「見える」「感じる」が接続し、その内容を補充する。(29)は「が」が、(30)は「ので」といった接続助詞が接続する。(31)は「する」が接続し、(32)は「なる」が接続し、(33)は「ある」が接続する。(34)は「なる」の連用形「なって」が従属節を形成する。

(26)は雲の様子はどう見えたかを喩辞「雪の山」で表す。(27)は丘に光り輝くものを見た、その知覚内容を「大きな鏡が太陽の光に反射した」という喩辞で表す。(28)は「ウォーカー」のこの場での体感を「時間が止まった」という喩辞で表す。(29)は痩せた体がどのように見えるかを喩辞「骨と皮」で表す。

(30)は『積塵成山』がどのように見えるかを喩辞「鍋敷き」で表す。これらは知覚や思考に関わる形式的な用言を主節述語とし、その知覚・思考・感覚の内容を比喩によって補充するものである\*10。

(31)はあるべき心のありようを喩辞「水」によっ

かつ思考や知覚内容を表している。これは、比喩と思考・知覚内容の両者は一文内で併存し得る。

\*10 前田(2006)で「ように」節の<思考・知覚内容>を表す用法に相当する。ただし、同書では比喩は<類似事態>用法として区別されている。(31)(32)は比喩であり、

て表し、(32)は木々の様子を喩辞「鬱蒼とした森」で表す。(33)は吸収したい事柄の多さを喩辞「山」によって表す。いずれも「する」「なる」「ある」について、具体的な様子や量を喩辞の「ように」節が補充する。(31)(32)は前田(2006)における動詞変化構文における変化の結果を表す「ように」節に相当する。(33)は吸収したい事柄の多さを喩辞「山」によって表し、量を表す成分として働く。(34)はカタツムリの這った跡を「銀色の道のようになって」とし、それを付帯状況として提示する。

(35) 4枚の羽は、りん粉におおわれています。口はストローのようで、のぼしたりまるめたりすることができます。(PB2n\_00130 - 6680 川上洋一、松原巖樹『昆虫ナビずかん』)

(36) その優美な身のこなしは、ファッションモデルのようでもあり、フラメンコの踊り子のようでもあり、〔中略〕警察官のようではまったくなかった。(PB29\_00530 - 3390 逢坂剛『[ノスリ]の巣』)

(37) ジュンちゃんとはときに少女のようであって、ときには艶やかな表情で人を視た。(LBf9\_00173 - 70970 宮嶋康彦『日の湖月の森』)

(35)は蝶の口の形状を「ストローのよう」と説明する。「ようで」と中止節を形成することで、以後も文は継続し、口の動きをさらに説明する。(36)は身のこなし方を「ファッションモデルのよう」と評価する。「ようでもあり」と「ようで」に「あり」を接続させ、中止節を形成する。それにより、いくつかの直喩を並列させる。(37)は「ジュンちゃん」への印象を「少女のよう」と評価する。「ようで」に「いて」を接続させて中止節を形成し、「ときには艶やかな表情で」いることを示すことで多面的に人物を評価する。

### 3-3 主節述語でかつ否定形式の直喩

本項では主節述語でかつ否定形式が含まれる直喩の類型を示す(表3)。

(38) 人面瘡にいそぎんちゃくにカズノコですって。そんなもんぜんぶがこんな狭いところに住んでて、まるで団地よ〔中略〕「兎小屋よりましじゃないか。兎まで住んでたらいやだろう」「やめてよ。このうえ、兎だなんて」「兎のほうが月の世界のようかもしれん。むかしから女は月の満ち欠けによって生きるというから」(LB19\_00045-59830 姫野カオルコ『受難』)

(39) たった一人のときには実に静かなのに、大勢集まるとかくも騒々しくなるようではまるでゾンビの

表3 主節述語でかつ否定形式を含む直喩

AはBのよう	+かもしれない
	+ではない
	+でならない
AはBのように	+用言否定形
	+しか+動詞否定形
	+なりかねない
AはBのような+形式名詞	+ではない
	+に過ぎない
	+に違いない
	+かもしれない

ようではないか。(LBq3\_00176 - 15070 牛場靖彦『モendaイは君のその喋り方と態度だ!』)

(40) 「このご殿が私のすみかかや。思うてみれば夢のようであらぬ。」(OB3X\_00250-16930 津本陽『下天は夢か』)

(38)～(40)は語幹「よう」に「かもしれん」「ではないか」「であらぬ」といった否定形式「ん」「ない」「ぬ」を含む要素が接続する。

(38)は女性器の内部の話題において、「兎」の語が出現したことから、「月の世界のよう」という表現が導き出される。話題としては横道にそれており、「かもしれん」により話者の断定を回避しながら、月経の話に移る。(39)は一人では静かなのに大勢になると騒がしくなるような人物を「ゾンビ」と評価する。「よう」に「ではないか」が接続し、疑問の形式を取るが、読み手に回答を求めているとは見えず、修辭的疑問となる。修辭的疑問は「問うふりをして沈黙を強いる」(香西 2010:60)ことを目的とする。ここでも相手の応答を求めないことにより自身のコメントを相手に押し付けるものと言える。(40)は「ご殿」が自分の住居になることを「夢のよう」と喩える。「であらぬ」により、「ご殿」に住めることへの強い心の動きが表示される。

(41) 声の主が私たちの訪問の相手だった。仙人のようには見えなかった。(LBb9\_00068 - 17460 田中芳樹『戦場の夜想曲』)

(42) シリウスのそばに、ひどく小さな星が、にぶい白い光を放っている。〔中略〕シリウスからくらべると、まるでケシ粒のようにしかみえないのだ。(LBb4\_00019-6160 海部宣男『宇宙の果てへの旅』)

(43) 大光量はサイト全体を照らすのに最適だが、テナント内部を明るく照らすとシルエットが影絵のようになりかねない。(PM55\_00129-105690 大森弘恵『ガルヴィ (GARRRV)』)

(41) は連用形「ように」に「見えなかった」、(42) は「しか+動詞否定形」が、(43) は「なりかねない」が接続する。

(41) は訪問相手が「私たち」の想定と異なり、豪華な生活であることを受け、「仙人のようには見えない」とする。「仙人」という比喩的なイメージで想定していた相手への印象を否定している。(42) はシリウスの伴星について、シリウスと比べた時のその小ささを「ケシ粒のよう」とする。そして、「しかみえない」によりそれが人物の知覚内でそれ以外には評価しようがないことを表す。(43) は強い光で照らした際にできるシルエットを「影絵のよう」とする。ここでは「なりかねない」によって、それが実現した事態ではなく、話者の懸念であることを表す。

(44) 「教授会の席上、すでに委員会で決定された事項に執行部が批判的発言をするとは信じられない。まるで国会の政府答弁に与党がブーイングしているようなものじゃないか」, 等々。(LBr3\_00193-15330 川村雄介『サラリーマンのための大学教授入門』)

(45) 人類全体の歴史からみれば、二十世紀は、幕間劇のようなものにすぎぬのではないだろうか。

(LBg3\_00028-21890 荒巻義雄『紺碧要塞の戦略論』)

(46) 動物全体の姿は、たいへん大きな棘の多い、重い尾を持ったカメのようなものだったにちがいない。

(LBe4\_00002-65750 W.E.スウィントン, 小島郁生『恐竜』)

(47) 「書物か、紙束のようなものかもしれない。うまく隠してあるはずだ」(もうちょい文脈を見る)

(PB19\_00101 - 41990 ロイス・マクマスター・ビジュアルド, 梶元靖子『スピリット・リング』)

(44) ~ (47) は連体形「ような」に形式名詞「もの」が接続した形式に、「ではない」「に過ぎない」「だっに違いない」「かもしれない」が接続する。

(44) は教授会の席上で決定事項に批判的発言することに対して、「国会の政府答弁に与党がブーイングしているようなもの」とする。「じゃないか」を接続することで、聞き手への疑問の形式をとる。ここでは相手の反応を期待したものではなく、修辭的疑問として用いる。(45) は人類全体の歴史から見た二十世紀を「幕間劇のようなもの」と評する。「にすぎぬ」

とすることで、一般に想定されるような二十世紀の歴史上の影響の大きさを小さく評価し、「のではないか」とすることで修辭的疑問とする。(46) はスコロサウルスという恐竜の外観について、「たいへん大きな棘の多い、重い尾を持ったカメのようなもの」と説明する。恐竜であり、実際には観察することができないため、「にちがいない」によって推定とする。(47) は探しているものを「書物か、紙束のよう」と説明する。未発見の事物に対しての比喩の使用であり、「かもしれない」の付加により断言を回避する。ここまで見た事例は否定形式は含まれているが、(41) を除きいずれも実質的には肯定文となる。

### 3-4 従属節述語でかつ否定形式を含む直喩

本項では従属節述語として用い、かつ否定形式を含む直喩の類型を示す(表4)。

表4 従属節述語でかつ否定形式を含む直喩

AはBのようで	+ないのか
AはBのように	+思えるかもしれない
AはBのような+形式名詞	+でない
	+でしかない
	+かもしれない

(48) ぼくはいつも、なぜ世界が地図のようでないのかと不満に思う。(OB2X\_00207-33060 安部公房『方舟さくら丸』)

(49) また、上司の話を部下に伝える場合には、自分の解釈を入れないようにして、端的に、上司の言葉通りに伝えるようにすることだ。そのまま伝えるのでは、まるでバカのように思えるかもしれないが、自分の解釈を入れるとかえって、わけがわからなくなってしまうという自覚が必要だ。(OB6X\_00215-26190 樋口裕一『頭がいい人、悪い人の話し方』)

(50) ■それでは、われわれのような一般ユーザーがセマンティック Web の恩恵を受けられるようになるには、あとどれくらいの時間が必要なのでしょう。

●[中略]セマンティック Web は、レモネードのものではありませんから、あとどれくらいの時間でできあがるのかという質問には答えにくいですね。

(PM55\_00084-37380 ティム・バーナーズ・リー, iINTERNET magazine 編集部『iINTERNET magazine』)

(51) それなのに泣声の寸法は、一米くらいのか細い糸のようなものでしかないから、[中略]吹きまくる大飯喰らいの風に、みごとに掻き消されてしまう。

(PB17\_00109-20980 種村季弘『土方巽の方へ』)

(52) ほんとうの愛って、これはとても難しいことだが、どこまでも澄んで、ゆったりと波打つ、広く大きく、深い海のようなものかもしれない、と思ったりもする。(PN5b\_00008-1790『毎日新聞』)

(48) は連用形「ようで」に「ないのか」が接続する。さらに補文マーカー「と」により「思う」に接続する。「世界が地図のようでない」ことが話者にとって不満であり、それがこの人物の普段の思考であることを示す。(49) は連用形「ように」に「思えるかもしれない」が接続し、そこに接続助詞「が」が接続する。上司の話を部下にそのまま伝えることを「バカのように」と評しつつ、「思えるかもしれない」でそれを可能性として提示する。それを前件とし、「自分の解釈を入れるとかえって、わけが分からなくなる」を後件として導く。

(50) ～ (52) は連体形「ような」に形式名詞「もの」が接続し、かつ「ではありません」「でしかない」「かもしれない」が接続する。(50) は「セマンティック Web」について、「レモネードのようなものではありません」と述べる。複文の前件に否定の比喻を用いた表現である<sup>\*11</sup>。「どれくらいの時間でできあがる」かはわからないため、オーダーしてから提供されるまでの時間が一定程度決まっている飲み物(ここではレモネード)と同じではないことを否定するためである。

(51) は「泣声の寸法」を「一米くらいのか細い糸のようなもの」と評する。「でしかない」とすることで、それより以上の大きさとして評することができないことを表し、後件で「みごとに掻き消されてしまう」ことを導く。(52) は「ほんとうの愛」について、「どこまでも澄んで、ゆったりと波打つ、広く大きく、深い海のようなもの」と評し、「かもしれない」によって断言を回避する。かつ、補文マーカー「と」によって「思ったりもする」に接続することで、人物の思考内に生じたものであり、他者に押し付けられない態度が生まれる。

#### 4. おわりに

本稿は、BCCWJ を用いて得た述語型の直喩を類型化し、それぞれの類型の性質や特徴を記述した。比喻だからこその特定の働きを持つというよりも、事物や事象に対する説明や評価を行うことが基本的な働きである。また、接続する文法形式により、それを伝達

する態度を調整している。つまり、述語型直喩の働きは、日本語の題述構造を持つ文における述語の基本的な機能や性質に則るものである。比喻表現は修辞として特別な機能や逸脱的な機能を有するとされることが多いが、その働きは日本語の基本的な構造と機能に規定されている。この点を踏まえ、直喩を使用する意図や目的、実際に用いられた直喩の効果を考える必要がある。比喻研究は独自の理論的な枠組みや概念を利用してこれまで分析・考察を重ねてきている。しかし、その成果が日本語のどのような意味・文法的な規則と関わり、語用論的な条件と関与するかが明らかでない。実例に基づき、より一般的な日本語・言語研究の枠組みや概念を利用して、整理・分析・考察を行う必要がある。本稿の成果は、その基礎的な作業として位置付けられる。

本稿は書き言葉コーパスを用いたため、用例が限定的ではある。話し言葉における用例や内省によって作成した用例は本稿の整理の対象外である。ただし、1億語規模のコーパスから助動詞「ようだ」を用いた直喩を概ね抽出した調査をもとにするため、日本語の「ようだ」型直喩がとり得る述語形式はある程度網羅している。また、直喩においては「ようだ」型直喩が多数であるため、日本語の直喩を述語として運用する際の典型的な形式を明らかにしたと言える。

#### 参考文献

- 1) 菊地礼 (2022) 「現代日本語における直喩の構文論的研究」中央大学大学院博士学位論文。
- 2) 香西秀信 (2010) 『レトリックと詭弁—禁断の議論術講座』ちくま文庫。
- 3) 国立国語研究所 (1977) 『比喻表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57, 秀英社。
- 4) 小松原哲太 (2023) 『『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用例—直喩へのアノテーションの事例—』『国立国語研究所論集』24 号, pp.45 - 58 : 国立国語研究所。
- 5) 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』講談社。
- 6) 佐藤信夫ほか編 (2006) 『レトリック事典』大修館書店。
- 7) 杉本巧 (2005) 「隠喩の否定のレトリック」『文体論研究』51 号, pp.1 - 11 : 日本文体論学会。
- 8) 鍋島弘治朗 (2016) 『メタファーと身体性』ひつじ書房。
- 9) 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』くろしお出版。
- 10) 山梨正明 (1988) 『比喻と理解』東京大学出版会。

<sup>\*11</sup> 複文の前件に否定形式を含む比喻表現については杉本 (2005) を参照。